

## 書 評 会

中山善樹著『エックハルト研究序説』（1993年）

司会

九州大学 谷 隆 一 郎

片柳栄一著『初期アウグスティヌス哲学の形成  
——第一の探求する自由』（1995年）

司会

慶應義塾大学 中川 純 男  
(於 英知大学 1999.11.14)

中山善樹著『エックハルト研究序説』

---

### 司会報告

谷 隆 一 郎

本書はエックハルトの学的営みの中心たるラテン語著作に本格的に取り組んだ作品であるが、そこではとくに「始原」(principium)、「存在」(esse)、「神認識」,「秘蹟」(sacramentum)という四つの、相互に呼応しつつ全体として一なる問題の解明に論が向けられている。すなわち著者によれば、始原とは「神的ペルソナの流出が永遠に行われるところ」であり、「存在」たる神自身でもあるが、「エックハルトの形而上学は静的に把握された存在一元論ではなくて、帰属のアナログアによって規定された動的な存在論であった。」そのことは、「始原=存在」たる神の認識の道が、「魂のうちなる神の子の誕生」という中心的事態としてはじめて問題化してくるということでもある。本書の最終章での「秘蹟の現在」という言葉は、そのことの成立根拠・場を指し示しているのだ。そして、かかる「秘蹟の現在」における「神の子の誕生」とは、絶えず、今、ここなる「不断の創造」として生起すべきものであり、すべての人がそのような仕方ですべて「救い」ないし「神化」(神的生命への与り)へと招かれていることになろう。

今回の書評会では、その書（および中山氏の最近の訳註書『エックハルト説教集』）について、活発な質疑応答が為された。その場に参加された方々のうち、後記の三名の方から質問原稿を頂いているが、それらに対しては、中山氏から改めて応答があるのであろう。ここであらかじめ一言だけ言うなら、それらの御質問はいずれも、この有限で可変的な世界にあって、われわれが真に存在に、そして神に与り得るその機微に関わるものと思われる。それはもとより、「キリストの出来事」の同時的な現存という謎・神秘に触れるものであって、容易ならざる問題である。が、書評会というかたちを通してであれ、この度、「受肉の歴史性」が単に人ごとではなく、われわれの身に経験される出来事たり得るゆえんを、ともに何らか望見し、そうした時（カイロス）を多少とも共有し得たことは、貴重な機会であったように思う。

## 質疑応答の概要

松田美佳氏

『命題集へのコラチオ』と『1294年にパリで行われた復活祭の説教』で述べられている秘跡論がドイツ語著作の「離脱」「神の子の誕生」の原型とも考えられるという本書中の見解を興味深く拝読いたしました。ただし、中山先生は、エックハルトの秘跡論を超秘跡的と主張するエーベリングの解釈は間違っていると書いておられますが、儀礼の外面的形式ではなく、心情を重んじるエックハルトの思想からするなら、エーベリングが「超秘跡的」と言っていることはある意味で当を得ているように思われます。じっさい、ドイツ語著作の『教導講話』では、離脱して石ころを踏むほうが、離脱しないで主の聖体を授受するよりよいと述べられています。エックハルトにおいて秘跡の外面的形式と心情とはどのような関係にあるとお考えでしょうか。

須沢かおり氏

エックハルトは、受肉の歴史性が靈魂のうちで内的経験となるということ「靈魂における神の誕生」という出来事として理解している。エックハルトにおいて、聖句を靈的に味わうという聖書の読み方があることが見られることを著者は指摘された。このようなエックハルトの聖書解釈は、聖書と対話し、そこから靈的洞察を得るとい

う「現在、この場において、聖書をわたしとの関わりで読む」という、いわばヘブライ的、ラビ的な聖書の読み方の伝統に連なるものであるということではできないだろうか。またこの関連で、ユダヤ人の思想家マイモニデスのエックハルトに対する影響も考えてよいか。

### 宮本久雄氏

中山氏の『エックハルト研究序説』中の「命題集のコラチオ」に関する論稿についての質問。リカルドゥスは、秘跡論において罪からの解放たる現在から悲惨からの解放の未来へのクロノロギッシュな人間の変容を説く。これに対しエックハルトは、秘跡において磔刑の今と甦りの栄光と救済の今との同時的現成をエスカトロギッシュに語る。エックハルトのそのような始原と終末を一挙にするような理解にとって歴史(時)とはどういう意味をもつか。これが質問。

中山氏は、そのエスカトロギッシュとは霊的解釈において可能となる足下の出来事であるという風に応答された。

論者は日頃ヘレニズム的神秘主義とキリスト教的歴史性の対立のカテゴリーによっては、キリスト教的神秘体験は理解不可能であると思っていた。今回の「書評会」において筆者は、エックハルト自らが「神の子の誕生」において歴史的な出来事になり、自らが語り(一般には説教といわれる)そのものとなったことの自覚を深くした。それは実にヘブライ的 Dabār (事即言)を体言したエックハルトの歴史性の証言であると考え。そして今回、歴史性を云々して歴史に生きないことと歴史を言挙げせず歴史を生きることの対比の重要さと、後者を生きたのが実にパウロを始めとする聖書的人物像(預言者は事件や時を語り、自らもそう成ったのであるが)であることが際立ってきた。その意味でE.シュタインもとりあげうると考える。しかし同時に、哲学としては歴史、終末、カイロスとクロノスなどはもっと議論されてよいように思われてならない。